

音楽都市のエコシステム

Music City Eco system
ミュージックシティエコシステム

音楽都市インタビュー



High-Life

公益財団法人ハイライフ研究所

インタビュー 深町健二郎氏、松尾伸也氏

日時：2023年11月22日（火）14:00～17:00

場所：福岡文化芸術振興財団応接室（福岡）



深町健二郎（ふかまち けんじろう）：右

音楽プロデューサー

1961年福岡市生まれ。ソリアプラザイベントプロデューサーを経て、「ドオーモ」（KBC）や「アサデス。九州・山口」（KBC）をはじめ、「Got Many Tunes」（RKB）「オトナマチアソビ」（LOVE FM）など、TVやラジオ番組へ多数出演。「Sunset Live」「ベイサイドフェスティバル」プロデューサー、「福岡ミュージックマンス」総合プロデューサー。日本経済大学芸創学部教授。公益財団法人福岡文化芸術振興財団理事。福岡音楽都市協議会理事。福岡の街を音楽で盛り上げ、その魅力を全国や世界に伝えるべくマルチに活動中。

松尾伸也（まつお しんや）：左

株式会社西鉄エージェンシー 取締役マーケティング企画本部長

MUSIC CITY TENJIN 運営委員会代表 企画運営副委員長

1961年生まれ。西鉄エージェンシー入社以来、西鉄のソリア計画や天神サイトの立上げなど、まちづくりやメディア開発などの業務に関わる。2002年にまちの活性化と音楽的環境の向上を目指して、公共空間などをステージとした「MUSIC CITY TENJIN」をスタートさせた。

世界の音楽都市が一堂に会する

「MUSIC CITIES CONVENTION」に触発された

—————福岡音楽都市協議会をつくられたきっかけや経緯についてお聞かせください。

深町：福岡は音楽人や芸能人を数多く輩出している特別な土地柄というか、気質みたいなものがバックグラウンドにあって、それが一つの形に表れたのが、いわゆるフェスなんです。

私も30年くらいに渡って糸島で開催されている「SUNSET LIVE」や「ベイサイドフェスティバル」にプロデューサーとして関わっていますが、それに加えて「中洲 JAZZ」、博多駅の「九州ゴスペルフェスティバル（今年から

Sing!HAKATA に改名)」、天神の「MUSIC CITY TENJIN」、能古島で「イスラ・デ・サルサ」があります。

これらはすべていわゆるイベントの主催ではなく、まちづくりにトライしている方たちや飲食店など、かなり特殊な成り立ちであるフェスがほとんどなんですけど、それが偶然に9月に集中してたんです。これに横串を刺したら、もっと福岡の特異性のような部分を外部にPR出来るのではないかと思い、連携しませんかと各主催者にお声がけして皆さんの賛同を得て、“福岡の9月は1ヶ月間音楽の祭典だ”というひとつの形にして、福岡市にもサポートしてもらい「Fukuoka Music Month」という大きな事業になりました。2023年で10年目ですが、互いのフェスそれぞれの相乗効果も実際に生まれましたし、より多くの皆さんに知られて、福岡という音楽都市の象徴というところまで表現できたかなと思っています。

ちょうど5年目あたりに、イギリスの音楽系コンサルの「サウンド・ディプロマシー」が、日本の音楽都市をリサーチしていたら福岡がヒットしたということで、2018年にオーストラリアのメルボルンで開催される「MUSIC CITIES CONVENTION」という世界の音楽都市が一堂に会するコンベンションに招待されて、福岡の取り組みをプレゼンしたのですが、そこで我々はかなり触発されたんです。

各音楽都市の知見——例えば、自分たちの国では治安改善にも音楽が活用されているとか、健康プログラムにも音楽を取り入れているとか、まちづくりだったり観光だったり……さまざまな場面で音楽の力を活用した取り組みの発表しているのを体験して、これは素晴らしいなと思いました。

我々はそれまでまちを熱く盛り上げ、賑やかにする部分にイベントを使うということをしてきたわけですが、それは所詮9月の1ヶ月間だけの出来事。終われば普通の日常のまちに戻ってしまう。コンベンションに参加して、もっと恒常的に何かいろいろと仕掛けをしていくべきじゃないかと思ったんです。

それで、音楽都市協会をつくってはどうかという話になりました。福岡はコンパクトだし、ジャンルも全部混ぜ、さらに音楽団体だけではなく、経済界や大学など、産官学民が混ざり合うような組織にした方が、よりオリジナルで、さまざまなアイデアが生まれのではないかということから、3年前に立ち上げ、理事長にはJR九州特別顧問の石原さんをお願いし、福岡市長の高島さんに顧問になっていただいて、その他各関係団体の理事にも入っていただきました。企画運営委員会のリーダーは私がさせて頂いて、そこに各部会を立ち上げて毎年様々な取り組み行っています。

——「サウンド・ディプロマシー」は、「Music Month」に着目されたんですね。

松尾：たぶんサウンド・ディプロマシーも“Music city” “Japan”とかで検索したんだと思いますが、多分その時に「MUSIC CITY TENJIN」が出たんだと思うんです。「MUSIC CITY TENJIN」は私がずっとやっているイベントでして、最初に私に連絡があり、「招待するので、ぜひ来て欲しい」ということだったので、私が行くより深町さんに行ってもらった方がいいだろうと思って、お繋ぎしたという形だったんです。それが2017年ですね。

やり取りする中で「Music Month」としての取り組みを紹介したところ、なおさら「いいね」という話になり、深町さんにプレゼンしてもらいました。

——「MUSIC CITIES CONVENTION」はどのような会議なのですか。

深町：世界の都市で持ち回りで開催されていて、すでに10回ほど開催されていると思います。運営団体がサウンドディプロマシーで、産業振興のためではなく、むしろ社会課題やまちづくりに対して、「果たして音楽にどこまで可能性があるのか？」を学び合う場みたいな感じがあります。アメリカ、ヨーロッパ、アジアで開催されているのですが、まだ日本では開催されていないんです。

松尾：いままで開催された都市は、ロンドンとか、ニューヨークとかパリとかの大都市ではなく、その次とかその次の次ぐらいの中規模都市という感じです。

深町：より音楽の特性がある都市をサーチをしていくと、アメリカだったらメンフィスだったりニューオーリンズだったり、中堅都市が上がって来るんだと思います。

松尾：2023 年はアメリカのハンツビル（HUNTSVILLE）という都市での開催ですね。中西部の、宇宙産業とか航空産業の都市でした。

—————「触発された」とおっしゃいましたが、それはどのようなところにでしたか。

深町：私も漠然と、音楽のチカラというのは、単なる趣味嗜好だけに留まらず、人種の壁とか世代とか、文化の壁とか民族の壁も越えられるぐらいのポテンシャルを非常に感じていましたし、私たちが何気にやってた「Music Month」も、ある意味まちづくりに近い行為でもあったし、何かもっとその可能性はあるなというところですね。

—————発表された都市の取り組みで印象に残ったところはありますか。

深町：例えば、コロンビアでは、治安が悪いために子どもたちがすぐ武器とかドラッグに手を出してしまう状況をなんとか改善するために、分かりやすく言えば、武器の代わりに楽器を持たせようという取り組みを長くやっているんだそうです。それが非常に功を奏して、著名なミュージシャンが生まれたり、治安も改善されたという事例がありました。ロンドンも、いわゆる「ナイトメイヤー（夜の市長）」がいて、夜の文化・経済をどんどん顕在化させていくことで治安がより改善され、それが可視化されることによって若者たちも健全になっていったとか……いろいろな活用事例があるんだなと思いました。

—————メルボルン以降も参加されましたか。

深町：その翌年の中国の成都（チエンドウ）のコンベンションにも参加しました。成都是歴史的なまちですが、その頃、クラシックがしっかり演奏できる大きなホールなどの施設を続々と建設していましたね。音楽都市宣言もして、イタリアのヴェローナと姉妹都市を結ぶセレモニーなども盛り込んでいました。

—————日本でコンベンションを開催する可能性はありますか。

深町：我々が日本で最初に招致ができないかなと思っています。2026 年ぐらいまでを目標に、福岡で開催できるよう、いろいろなやり取りをしているところです。招致の条件は多分クリアしていると思うのですが、資金面の目処がまだ立っていないので、それをどう工面するか……音楽都市協議会だけではこういう大きな会議はちょっと出来ないと思うので、外部に準備委員会みたいな団体を立ち上げなければいけないとは思っています。

これから建設される建物にも、 音楽都市らしい仕掛けを組み込みたい。

—————現在、音楽都市協議会を立ち上げてから 3 年経ったところですが、この 3 年間で振り返ってどんなことを感じていらっしゃいますか。

深町：そうですね……まあ良くも悪くも特別でしたよね、この 3 年間は。ただ、非常にやりやすかった面もありました。

例えば、福岡にはストリートライブを合法的にやれる場所が実は無かったんですね。勝手に演って、何かトラブルがあれば警察が来て止められるというような状況だったわけですが、福岡市と協議して、現在 8ヶ所をオフィ

シャルなストリートライブの場所として認定してもらっています。審査を通ったクオリティの人たちが優先的に投げ銭ライブを行っていいような仕組みができました。ストリートピアノも、ソラリアプラザに1台、ベイサイドプレイスにも1台、計2台設置しました。

また、本当はリアルな拠点が欲しいのですが、コロナ禍だったので、まずはWEBメディア「OTOJIRO」で発信し、その中にデータベースを構築中です。基本的に福岡で実際に活動しているミュージシャンに登録していただいて、そこから地場企業やイベンターとのマッチングなどが出来ます。ジャンルが多岐に渡るので、我々もすべて把握できていませんが、何とか一生懸命に捉えようとしているところです。

—————「OTOJIRO」の音楽家からエンジニアなど関係するプロフェッショナルまでデータベース化しようという取り組みは素晴らしいと思います。実際に皆さんからの反応はいかがですか。

深町：少しずつ浸透していている段階なのでまだ満足はしていませんが、ただ、それが功を奏している案件もあります。最近、中洲にできたホテル「ロイヤルパークホテル・キャンパス」は、インバウンドのお客さんが非常に多いホテルなのですが、そこに毎週ミュージシャンを派遣できないかという相談が来まして、我々のデータベースに登録していただいている方を派遣するという、事業も生まれたりしています。ハブとして機能している感じですね。

松尾：今年の3月の「FUKUOKA MUSIC SUMMIT」以降、アーティスト派遣の話も結構いただくようになっていきます。

深町：「FUKUOKA MUSIC SUMMIT」は、国際会議場で開催した、協議会主催のイベントです。何か一緒にできないかという提案をいただいて、協議会で取り組んでいる異業種文化交流の場をつくったり、最新の音楽制作セミナーをやったり、福岡出身の俳優の松重豊さんと光石研さん、音楽プロデューサーの松尾潔さんに来ていただいて、「福岡のこれから」「音楽都市として目指すべきこと」をテーマにトークショーを行ったりしましたし、福岡のZ世代のバンドのショーケースも開催しました。

松尾：おかげさまでいろいろなメディアに取り上げていただいたので、そこからいろいろとお話をいただくようになって、先ほどのホテルもそれを受けていただいたお話です。ミュージシャンへの還元もある程度出来ています。音楽産業振興と言えば、それも一助になっているのかなとは思いますが。

深町：やっぱり、個人のミュージシャンが、いきなり企業と繋がりにくいので、なんとか我々がネットワークをつくって、ちゃんと繋がるようにしたいですね。

—————福岡市以外からの反応はありますか？

松尾：問い合わせは、ちょこちょこ事務局の方にはあると思います。

—————福岡市が支援されているという点は認知されやすいでしょうか。

深町：福岡市がバックアップしてくれているのは大きいですが、ただ、僕らは福岡市だけである必要は無いと思っています。県でもいいと思っているので、できる限り広げていきたいところではありますけれど、まずはやっぱり、足元とどうか地固めをしなきゃなというのはあります。

—————いま「天神ビッグバン」で開発が進み、公開空地も出来てくると思いますが、こうした開発への提言などもされていますか。

深町：むしろ公開空地で僕らが取り組んでいるストリートライブができないとか、具体的に相談が来たりします。

松尾：「建築段階で、どういうものを考えていたらいいですかね？」みたいな相談が来ていて、福岡市のマスター

プランの提言にも入れていただいています。

深町：ありがたいですね。できてから相談されるより、前もってそういうことを相談していただけるのは、後で困る場合が結構あるんですよね。

松尾：「スピーカーだけは良いものを入れましょう！」ってよく言っています。何百億で建てるビルからすれば、建築費の数パーセントですから、ずっと残るのであれば最初から良いものを付けといた方がいいですよ、と。

深町：それで言うと、学校の現場も変えたいんですよ。音響設備が悪すぎるんですよね。だいたい、運動会とかで拡声器に毛が生えたようなスピーカーでガンガン鳴らして、近所から「うるさい！」って文句言われる。世知辛いけどいまそうになっているじゃないですか。でも現代のテクノロジーなら、指向性でピンポイントに音が出せる。さらにクオリティも高い音がそれほど高い金額でなくても出来る。PTA の予算ぐらいで多分賄えるんですよ。だからそういうところはちゃんと提言したいですね。

松尾：子どもたちが、あのひどい音を聞かされてるのって、ちょっと……ね。

深町：本物の音というか、クオリティのいいものを子どもの頃から聞いてもらった方がいいですから。気づいてないだけで、今はそこまで高額ではないですし、やろうと思えばできるんです。誰も言い出さないのがデフォルト化してしまってるのが現状です。駅もそうです。まちなかで流れる音、全部そうです。インフラとして取り組んでいきたいテーマですね。

選択肢が増えている現在だからこそ、 地方都市にできることがある

—————「未来ビジョン部会」と「人材育成部会」と「まちの賑わい部会」と「交流会部会」の4つの部会があるとうかがっていますが……。

松尾：あと「収益事業部会」がありまして、5つですね。

—————音楽産業振興に対しては、どんなお考えでどんな取り組みをされていますか。

深町：これは結構時間がかかるところだとは思っています。レコード会社とかプロダクションとか、どうしても機能的に東京に一極集中しています。だから、プロのミュージシャンを目指す場合には、いままでも、いまもそうなんですけども、やはり東京を目指さなければいけないという前提があって、福岡は人材を輩出してはいても、流出してしまう。

松尾：音楽業界の中でも選択肢が増えています。昔なら、テレビに出て、レコードが売れて、紅白に出て、アーナツアーをやって……とかパターン化されていましたが、いまはそこがゴールではない人たちがいっぱいいます。そういうことに共感してもらえるような人たちが世界中にいるとすれば、ネットで繋がって世界的に広がっていくのであれば、我々みたいな地方により可能性が出てくるのではないかと思います。選択肢が増えているからこそ、地方都市ができるやり方もあっていい。

深町：いまこれだけネット社会になり、拠点はどこでもいいとするのであれば、何かそのインフラや仕組みをいろいろ考えられるんじゃないか。ジャンルによっては、もはや必ずしも東京に行くだけが全てじゃないので、選択肢を増やしたいんです。そういう取り組みに動き出したりしている案件はいくつかあります。ミュージシャンが住みやすいまちにするために、レジデンスみたいなものをつくらうかどうかとか、税制でも優遇されるような仕組みがあって

もいいかもしれない。我々も運営資金が必ずしも潤沢ではないので、そこをなんとか動きやすくするためには、例えば、まだ具体的なわけではありませんが、宿泊税と同じようなエンタメ税……コンサートチケットの数パーセントが何か基金に回せたらどうだろうかとかいうアイデアを部会で議論しているところです。

—————個人を対象とした人材育成もやっておられますか。

深町：セミナーがその一つです。音楽業界では、「コライト」という共作方法がいまかなり活発になっています。曲をつくるにも海を越えて海外のアーティストと一緒に共作することも多々ありまして、それを実際に実践している人に講師として来てもらって、福岡でそれを学んでもらうという機会を設けたり、具体的にはタイや台湾の人気バンドに来てもらって福岡のアーティストと一緒にコライトする場を設けたりもしました。

福岡の気質を活かし、

福岡のブランディングに音楽を活かしたい

—————ミュージシャンを育てると同時に、まちの中で音楽が溢れているような都市を目指して行こうとした時に、いま福岡に足りないものはありますか。あるいは、もっとこうして行こうと思っていることはありますか。

深町：やはり地方都市なので、スポンサー問題ですね。趣旨に賛同してくれる企業はもちろん存在するんですけど、なかなか多くは集まらない。この問題はなんとかしたいですね。お金がないと規模が小さくなりがちですが、逆に福岡でしかできないこと、誰もやったことがないようなことを目指すしかないのかな、と思います。

派手にイベントを打つのは大事ですが、それだけやっていてもなかなか上手く行かないので、時間をかけて地道にじっくりやる必要があると思います。

松尾：やはり継続して地力をつけるというか、音楽活動をする人の普段の生活を応援できるような方法を探っていく必要があると思います。ストリートライブの場所を広げるのもその一つですし、そういうことをやっていることを知らしめることも必要です。

アジア中心にインバウンドも増えていきますから、そういう人たちにしっかりしたライブ情報を恒常的に届けられるようにしたい。そうすると会場のデータベースも充実させる必要がある。韓国からの観光客がふらっとジャズのライブを聴きに来ることも少なくないようなので、いま音楽マップをつくらうとしているんですね。より充実させて、より広げていく活動をしていかないといけないなと思っています。

深町：いまは観光もかなり体験型を目指している方が多いので、そういう人は、福岡でなにかエンタメ体験できる場所がないかとか探していると思うんですよ。

松尾：インバウンドの人たちは、ネットに落ちている情報をうまく組み合わせて、思いもよらない場所に来ている人も多いので、そういう中に音楽をうまく入れ込めたらいいなと思っています。アジアに近いという地の利を生かした仕組みづくりにも力を入れていきたいと思っています。

深町：昔であれば個人商店がせめぎ合っていて、「このまちはこういう文化があるよな」って分かりやすかったんですけど、現代はかなり都市のコモディティ化が進んでいるので、それがどんどん埋没しているような危機感もあります。

福岡は「山笠」「どんたく」という祭りがまずベースとしてあります。「のぼせもん」とよく言われるんですけども、そういう気質のあるまちなので、そうした点と直結しているのが音楽ではないかと思っています。なので、音楽を十分

活かしたブランディングができると思うんですね。

**音楽家を育む都市環境が必要であり、
音楽体験ができる場が必要であり、
音楽という資産に恒常的に触れられる場が必要**

—————世界の音楽都市の中で注目されている都市はありますか。

深町：僕らが一番ベンチマークしているのはロンドンですね。ビートルズを始め、音楽で世界にアピールしていますから。リバプールには、「ビートルズストーリー」というミュージアムがあって、世界から常に観光客が来ています。

しかし、そうした遺産があるだけではない。ストリートパフォーマンスの仕組みもしっかりつづられているし、PRS ファンデーションという財団（イギリスの著作権協会が母体となっている財団）では、運営資金のかなりの割合が若手の育成とかに使われています。どうしても売れるものばかりにお金が行きがちですが、本来音楽は多様性があるジャンルです。爆発的には売れないけれども、この才能は絶対に育てたいという人をサポートできるような体制がイギリスにはちゃんとできています。実際、そこから売れたミュージシャンの事例もたくさんあります。

松尾：南ロンドンでは新しい音楽シーンが出来ていて、いま世界的に注目されていますね。「コーチェラ・フェス」のような世界規模のフェスにも、そこからどんどんアーティストが送り込まれています。ビートルズ以降、いかに外貨を獲得するかという成功体験があるんだと思うんですが、それがもうきっちり制度としてあるのがすごいし、ちょっと羨ましいですね

深町：ロンドンではなぜそんなに音楽が盛り上がっていくのかをずっと知りたかったんですが、その分かりやすい事例の一つに出会いました。ある音楽プロデューサーから、ホームパーティの誘いを受けて、市内からバスで20分くらいの郊外に、若いミュージシャンが暮らすレジデンスがあったんです。工場をリノベーションをしたような建物の中に、20人ほどのミュージシャンが共同生活をしていました。部屋は独立しているんですけど、リビングやキッチンが共有。リビングには楽器なども置いてあって、自由にセッションなどが出来るような環境でした。切磋琢磨できるし、いつでも音が出せる環境がある。こういうレジデンスは福岡には無いですから、同様のレジデンスがあれば、福岡を目指す人が生まれるかもしれないですし、いろいろやれそうだなと思ったりしましたね。

—————「ミュージシャン・イン・レジデンス」ですね。

深町：そうです。それを目指したいんです。「コライト」のような制作方法もずいぶん盛んになって来ているので、もっと交流できる場が欲しいなと思っています。

いま天神ビッグバンでまちがどんどん新しく変わっていて、日本経済が頭打ちの中では、福岡はまだ元気があると思うのですが……悲しいかな、時代なんでしょうけれど、お金の直結しなければならないスペースばかりなんです。ホテルだったりオフィスだったり、商業施設のまちになっていて、遊びの部分がかなり薄い。謎なスペースも少ないですし、文化を体感できる空間が減っています。

だとしたら、中心部ではないところに文化ができてもいいのかなと思っています。だから、レジデンスも当然、ちょっと離れた、誰もまったく注目していないような場所で、リノベーションできる場所があれば、新しいまちづくりができるんじゃないかなと思っています。

松尾：拠点をつくりたいんですね。福岡市のアートの拠点が中学校の廃校跡地にできたのですが、音楽の

拠点も欲しいと思っているんです。

—————拠点があれば、都市の中に視覚化できますからね。

松尾：“視覚化”という視点はすごく重要だと思っています。我々がスリートピアノやストリートライブをやっているのも一つの視覚化です。音楽都市というイメージ付けが重要だと思っているので、拠点があってアーティストをサポートしているということが視覚化されれば、いろんな話が寄せられると思うんですよ。

深町：そういう意味でも象徴的な場づくりはしたいんです。先ほどから言っているように、福岡では多くの人材を輩出していて、ファンもたくさんいるのに、いざ福岡に来た時に、そこに触れられる場所がほとんどない。常にお勧めできる場所がないんです。

だから長期ビジョンにも挙げていますが、エンターテインメントミュージアムのようなものは、いずれつくりたい。福岡の音楽を学ぶこともでき、音楽を体感できるようなインタラクティブなものもあるような、音楽をテーマにしたミュージアム的な施設は欲しいと思っています。

そうした施設はアメリカにもいくつかあります。シアトルには EMP（エクスペリエンス・ミュージアム・プロジェクト）というエンタメがテーマのミュージアムがあります。ここはマイクロソフトの共同創設者ポール・アレンが私財を投じた立派な施設です。またクリーブランドには「ロックの殿堂」があるなど、地方都市に分散してるんですよ。日本はそういうテーマ性のあるミュージアムがまだ少ないと思うんです。

松尾：美空ひばり記念館とか、個人の記念館はありますけどね。

深町：音楽を大きくテーマとして捉えたミュージアムができると、「福岡に行ったら、まずあそこに」という場所になったらいいなと思っています。アートにおいては、福岡アジア美術館は世界に誇るべきコレクションだし、テーマもはっきりしているので、ワンアンドオンリー。福岡にしかないものを作って行きたいですよ。

音楽を都市の資産としてストックしていきたい

—————福岡のホールやライブハウスなどの施設の現状はどういう感じですか。

深町：実際のところ、特に福岡が突出している部分はないと思います。都市規模に応じたそれなりのホールだし、ライブハウスです。一時期ライブハウスが人口比で一番多いと言われた時もありましたが、コロナを経てどうなのか。福岡が環境として恵まれているかといえば、そうでもないと思いますね。

もちろん、福岡よりもさらに小規模な地方都市に比べたら全然充実しているし、九州の中ではまあ、良くも悪くも一極集中みたいなのところもありますから、そういう意味では意外といい環境なんだけれども、これだけの人材が輩出された理由の一つとして挙げられるほど環境が恵まれているというわけではないと思います。

—————では、人材が輩出された理由は何だったんでしょうか。

深町：僕が勝手に思うのは、やっぱり「のぼせもん」のまちだから、やりたがる人が多いですね。「どんたく」というお祭りがその象徴ですが、あれの何が面白いかは実は誰も分析できないんですよ。でも、毎年百万人以上のお客さんが天神に集まってくる。それはみんな出たいからなんですよ。見に行きたいというより、舞台に立ちたいし、着飾ってパレードで歩きたい。そういう人たちがすごく喜ぶお祭りなんですよ。子どもの頃から意識しなくても、舞台に立ってなんか歌っていたとかいう人も実際多いし……そういうものが何かバックボーンにあるんだろうとは思いますがね。だから、ホールとかライブハウスが充実しているとかじゃなくて、自然発生的に、いつの間にかできたんだろ

うなと思います。

まちなかで音楽やっていて思うのは、世代を超えるということです。ものによってはタダで見られる。だから、小さな子どもたちが原体験的に、爆音にドーンとまずやられるとか、そういうきっかけにもなってるんじゃないかなと思うんですよね。まちなかでどンドンそういうのが表出して行った方が、より面白いなと思うんです。音楽って趣味の世界だからコア化するんですよね。ファンだけで完結するライブもかなり多いんですけど、なかなか広がりがいい。それをフェスとかはお祭りだから、自分が推しているバンドだけじゃないものを見て、さらに出会うとか……

松尾：ふらっとまちに来て、何か演ってるやつを見て初めてファンになるみたいな出会いがありますよね。「このアーティストを“MUSIC CITY TENJIN”で初めて見ました」っていうのが、結構、多いんですよね。

深町：しかも、みんな笑顔になっているんですよ。やっている側も、スタッフも、何よりもお客さん……本当に皆さんの笑顔がたくさんあって、これっってもう、まさにウェルビーイングだなと思うんです。これからの時代に必要なテーマとも直結して行くと思うので、音楽にはポテンシャルがあります。

一方、経済的に見ると、音楽はまだまだ弱いと思います。バブル期のように、文化に投資する企業もあまりない。でも、これが無かったら、もう人間終わりですよ。文化というものは人間の生活にとって、間違いなく豊かに生きるには必要なものです。

—————プレイヤーは多いけれども、産業として支える部分が弱いのではないか、ということですか。

深町：先ほど、出たがりばかりっていう話をしましたが、やりたい人は多いんだけど、それを支えるプロデュース的なことだったりとか、企画とか運営の人間は圧倒的に足りてないんですよ。だから、例えば中国のアーティストとか台湾のアーティストとかが、まず福岡でレコーディングができるとか、そういう環境も整ったらいいですし。

—————本当にやらなければいけないことがたくさんありますね。

深町：もう次々出て来ますね。

—————今後、力を入れようと思っておられることはなんでしょうか。

松尾：個人的に言うと、協議会のキュレーションメディアである「OTOJIRO」をもうちょっとメディアとしての力をつけたいですね。もっとたくさんの人に見てもらいたいし活用してもらいたい。もちろんリアルの拠点も欲しいんですけど、「OTOJIRO」をバーチャルな拠点にしていけたらと思っています。ネットなら距離を超えて世界中に飛んでいきますから。

<参考>

福岡音楽都市協議会の概要

[福岡音楽都市協議会]

福岡音楽都市協議会（MCCF）は、「福岡を日本・アジアを代表する音楽都市へ」をビジョンに掲げ、2021年4月に設立された任意団体。音楽の分野において、幅広いジャンルのアーティストや、市民、団体によって多彩な活動が生まれ、都市の大きな魅力となっている福岡で、「音楽」を関連産業や観光、さらにはまちづくりの観点から活用・振興を図るため、市内で音楽関連の活動等を行う事業者・個人などをはじめとした、さまざまな立場の人が横断的に交流し、育成を行う組織。

<福岡音楽都市協議会メンバー>

- ・会長 福岡市文化芸術振興財団 理事長 石原 進（JR九州特別顧問）
- ・顧問 福岡市 市長 高島 宗一郎
- ・監事 福岡市経済観光文化局 理事 吉田 宏幸
- ・理事 日本ゴスペル音楽協会 理事 寒竹 麻衣子
- ・理事 NPO ティエンポ・イベロアメリカノ理事長 サンティアゴ・エレラ
- ・理事 公益財団法人九州交響楽団 専務理事 本田 一郎
- ・理事 九州大学芸術工学研究院 准教授 城 一裕
- ・理事 筑前琵琶保存会 会主 寺田 蝶美
- ・理事 福岡ミュージックマンス主催者会 会長 深町 健二郎

<事業内容>

- ① WEBメディア事業：キュレーションメディア「OTOJIRO mccf.jp」の活用
 - ・音楽イベント等の情報発信
 - ・データベース登録（福岡のアーティスト、音楽関連事業者）
 - ・ビジネス向けページの設置
 - ・音楽MAPの設置(予定)
- ② 人材育成事業
 - ・データベース登録者向けセミナー：クリエイティブセミナーの実施
 - ・コライティング（共同楽曲制作）：「BEYONDERS」イベントを開催し、福岡の若手バンド×タイおよび台湾のインディーズバンドのコライティングセッション等を実施
 - ・小学校での特別授業：「スクール・オブ・ロック in 草ヶ江 SHOW 学校」
 - ・人材育成プログラムの実施
- ③ 業者間・異業種交流事業
 - ・会員、異業種交流会：「FUKUOKA MUSIC SUMMIT」、「ミートアップパーティ」実施
 - ・ビジネスマッチング：データベース登録アーティストの各種イベントへの斡旋

④ まちの賑わい事業

- ・「FUKUOKA STREET LIVE」：まちなかのオープンスペースでアーティストパフォーマンスを 237 ステージ実施
- ・「FUKUOKA STREET PIANO」：ベイサイドプレイス博多、ソラリアプラザに設置
- ・「サウンドスケープ」：九州大学芸術工学研究院と連携した「音環境デザイン」の社会実験

※参考までに一般社団法人 We Love 天神協議会所管の「Fukuoka Music Month」：福岡で 9 月に開催される 5 つの音楽イベント（「糸島 SUNSET LIVE」、「九州ゴスペルフェスティバル in 博多」、「FUKUOKA ASIAN PICKS」、「MUSIC CITY TENJIN」、「NAKASU JAZZ」）を「Fukuoka Music Month」として集結。広域集客などによる街の賑わい創出と音楽産業の振興を目指す。

→音楽による都市ブランディングのコンサル会社「サウンド・ディプロマシー」の目に留まり、メルボルンの「MUSIC CITIES CONVENTION」で福岡の取り組みをプレゼン。2026 年の福岡開催を目論んでいる。

※その他の事業

- ・「福岡音楽都市協議会支援自販機」をコカ・コーラの協力のもと 3 台設置：売上金の一部を音楽の文化・産業振興、まちづくりに活用

High-Life

「都市×知」
音楽都市のエコシステム
Music City Eco-system

<研究メンバー>

| | |
|--------|-------------------------------------|
| 服部 圭郎 | 龍谷大学政策学部 教授 |
| 紫牟田 伸子 | 株式会社Future research Institute 代表 |
| 水本 宏毅 | 株式会社読売広告社 都市生活研究所 エグゼクティブリサーチディレクター |
| 榎本 元 | 公益財団法人ハイライフ研究所 主席研究員 |

<表紙デザイン>

| | |
|------|-------------|
| 伊藤 愛 | 株式会社ソフトマシーン |
|------|-------------|

発行 2024年7月
発行所 公益財団法人ハイライフ研究所
〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-14 銀座YOMIKOビル8F
TEL03-3563-8686 (代表) Fax03-3563-7987
<https://www.hilife.or.jp/>
©公益財団法人 ハイライフ研究所
©株式会社Future research Institute
